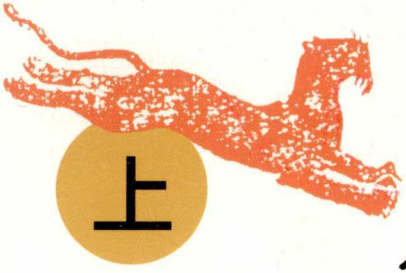
宮城谷昌光

Miyagitani Masamitsu

Sōgen no Kaze



上

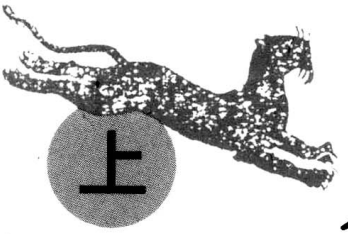
草原の風

宮城谷昌光

Miyagitani Masamitsu

草原の風

Sōgen no Kaze



上

常州大学図書館
藏書章

中央公論新社

宮城谷昌光

昭和20（1945）年、愛知県蒲郡市に生まれる。早稲田大学文学部卒業。出版社勤務のかたわら立原正秋に師事し、創作を始める。平成３年『天空の舟』で新田次郎文学賞、『夏姫春秋』で直木賞を受賞した。続いて５年『重耳』で芸術選奨文部大臣賞、12年には司馬遼太郎賞、13年『子産』で吉川英治文学賞、16年菊池寛賞を受賞。同年『宮城谷昌光全集』全21巻（文藝春秋）完結。他の著書に『孟嘗君』『奇貨居くべし』『三国志』など多数、また『風は山河より』など日本の歴史に題材をとった作品もある。

草原の風　上巻

二〇一一年一〇月一〇日　初版発行

著　者　宮城谷昌光
発行者　小林敬和
発行所　中央公論新社
〒一〇四－八三一〇
東京都中央区京橋二－八－七
電話　販売　〇三－三五六三－一四三一
編集　〇三－三五六三－三六九一
URL http://www.chuko.co.jp/

DTP　嵐下英治
印　刷　三晃印刷
製　本　小泉製本

©2011 Masamitsu MIYAGITANI

Published by CHUOKORON-SHINSHA, INC.
Printed in Japan　ISBN978-4-12-004288-1 C0093
定価はカバーに表示してあります。
落丁本・乱丁本はお手数ですが小社販売部宛お送り下さい。
送料小社負担にてお取り替えいたします。

●本書の無断複製（コピー）は著作権法上での例外を除き禁じられています。また、代行業者等に依頼してスキャンやデジタル化を行うことは、たとえ個人や家庭内の利用を目的とする場合でも著作権法違反です。

草原の風　上巻　目次

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

春風のゆくえ……7
常安留学……51
雲の影……101
華彩の路……149
地の声……199
予言……247

草原の風

上巻

春風（しゅんぷう）のゆくえ

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

春風がやさしく草を撫でるように吹いている。

が、ゆくてにみえる草も、足もとにある草も、冬の色から脱しかねているような生彩のない色で、風にさからう気力をもたぬ佇まいで揺れている。

劉秀の鬚もときどき風にふれてふるえた。

この美しい鬚をもった青年は、成人になったばかりであり、まもなく帝都にのぼって留学する予定である。あざなを、

「文叔」

と、いう。成人になると人はふたつの名をもたねばならない。かれの場合、秀、が本名であるが、この名はおもに家族間で用いられる。しかし、郷里の目上の人にたいして、郡や県の貴人にたいして、あるいは学問の師にたいして、本名を告げねばならない。

あえていえば、家族と親族および先祖はひとつの小宇宙であり、世間はべつの宇宙なのである。それゆえ人にとってもっとも重要であるのは、血がつながっている小宇宙であるため、その外にいる皇帝や王侯貴族よりも内にいる父母のほうが尊貴なのである。

「さあ、そろそろゆくか」

と、腰をあげて、みなをうながしたのは、劉秀の兄の劉縯である。かれのあざなは、
「伯升」
と、いう。
休憩は終わりである。
この兄弟は馬車にもどった。従者はすくなくない。十数人もいる。この兄弟の家は、
「蔡陽の劉氏」
と、呼ばれている。豪族であるが、規模をいえば、中以下である。蔡陽という県は荊州の南陽郡にあり、その南部に属する。ちなみに県とは邑のことであり、広域を指さない。郡のほうがはるかに広大である。とにかくその県をでてしばらく西へゆくとふたつの川の合流点がある。淯水と沘水という小さくない川があわさって南流する。その先はまさに大川というべき沔水である。沔水はじつは漢水のことなので、おなじ川がふたつの呼称をもっている。
劉氏の兄弟は、春光にきらめく淯水に沿うように北にむかってきて、一息入れたのである。
馬車にもどろうとする兄を呼びとめた劉秀は、
「ほんとうにわたしが行ってよいのですか」
と、念のために問うた。
兄の劉縯は一笑した。
「なにゆえなんじが行ってはならぬのかな」

「仲兄は家に残っています。ゆくのであれば、おふたりがゆくべきで、わたしが残るべきでしょう」

劉秀にはふたりの兄がいる。

長兄はここにいる劉縯であるが、次兄は劉仲という。蔡陽からおよそ百二十里北にある新野にゆくと語げた劉縯は、劉仲にむかって、

「秀をつれてゆく」

とだけいった。なんじは家に残れ、ということである。劉仲はおとなしい人で、長兄のいいつけにさからったことはない。このときも不満顔をみせるどころか、弟の劉秀のほうをむいて、

「新野の陰氏は評判のよい豪族だ。会っておいて損はない」

と、いった。

新野へゆくというのは、新野の豪族の陰氏の家へゆくということである。

陰氏の主を陰陸（あるいは陰睦）といったが、三年前の始建国三年（紀元後十一年）に亡くなった。嗣子を、

「陰識」

と、いい、三年喪中にあったが、今春、忌み明けを迎えた。のちに三回忌と呼ばれることになる祭りは、大祥といい、それをおこなうに際して、

「親族だけではなく、亡父の友人と知人もお招きしたい」

という陰識および陰陸の妻の鄧氏の意向によって劉縯も招かれたのである。が、招かれたのは劉縯ひとり、あるいは劉縯と劉仲であったのに、諸事に強引さがある劉縯がそれを枉げて、末弟の劉秀を引率したのではないか。

劉秀がそう疑ったことには、わけがある。

十一年前に父の劉欽が亡くなったあと、家計が苦しくなったせいで、劉秀だけが父の弟である劉良にひきとられ、いわばその家の猶子になっているからである。

叔父には実子がいる。名を、

「栩」

と、いう。この人がいるかぎり、劉秀は叔父の家を継ぐことはできず、かといって、実家にもどることもできない。

家産がおとろえていた実家は、叔父の扶けもあって立ち直った。劉秀は叔父に仕えながら、実家の復興にも尽力した。使用人とともに田圃にでて働きつづけた。が、長兄の劉縯はこの努力を称めなかった。称めるどころか、

「なんじは高祖の兄の仲といった器量か。いざというときに、役に立ちそうもない」

と、さげすんで笑った。

高祖とはいうまでもなく漢王朝を樹てた劉邦のことである。劉という氏をもつ者にとって、劉邦は遠祖であると同時に神である。劉縯も劉秀も系図をたどってゆけば劉邦にゆきつく。いわ

ば農民でありながら剣ひとつをひっさげて天下を平定した劉邦は、若いころに農作業をほとんどせず、無頼の徒のひとりであった。家業を守っていたのはおもに兄の劉仲であったが、戦乱の世になると、ひごろ顰蹙を買っていた劉邦が飛躍し、兄の劉仲は懦弱そのもので、死ぬまでひとつの武功も樹てられなかった。

——ゆえにまじめに家業に努めるものではない。

というのが、劉邦の信奉者である劉縯の信念であり、家のかたむきを直すと、家業の実務を弟の劉仲にまかせ、自身は近隣の豪族あるいは名士との交際をもっぱらにするようになった。このありようを、すこしはなれているところからにがにがしく、ながめているといってよい叔父の劉良は、

「模範にはならぬ。形だけを真似ても、その人にはなれぬ。高祖には天命があったのだ」

と、厳然といった。

さらに劉良は、

「高祖は酒に酔ってねむってしまっても、その軀の上に龍がいた。また官憲に追われる身になっても、高祖のいるところから天子の気が立った。億万人にひとりという人には、そういうふしぎなことがあるものだ。なんじの兄には、ひとつとしてふしぎなことはなかった。見倣うべからず」

と、劉秀にいいきかせた。

――わたしにもふしぎなことは生じなかった。

叔父の訓戒をきいているうちに、劉秀の心中にはさびしげな苦笑が浮かんだ。この世にはふしぎなことが寡なくない。そのふしぎさが天変地異にかかわりなく、個人の身の上に起こったときに、その人は天に選ばれた人となる。たとえば春秋時代に魯の国に生まれた孔子は、身長が九尺六寸もあった。一尺は時代によって換算の基準がちがうが、漢の時代までは一尺が二二・五センチメートルであると想えばよい。したがって九尺六寸は、二メートル一六センチメートルである。この身長は当時の人々を驚愕させ、かれらは孔子のことを、

「長人」

と、呼んで、めずらしがった。すなわち孔子は身長においてすでにふしぎさをもっていた。

――それにひきかえ……。

劉秀の身長は七尺三寸である。すでに漢の時代は終わり、いまや、

「新王朝」

と、呼ばれる時代である。一尺は二三・〇四センチメートルとなり、七尺三寸はおよそ一メートル六八センチメートルである。

――みすぼらしい身長だ。

劉秀が体貌で自慢できるのは、眉と鬚の美しさだけである。しかも富家や権門に生まれたわけではなく、実家から離れて叔父に養ってもらっている境遇にあっては、

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com